小さな森の方舟

わたしたちは自らの安全な「家」をつくるため、都市化によって他の生き物の居場所をたくさん奪い取ってきた。
そうしてできた「家」は、現在、異常気象による気温上昇や集中豪雨といった自然の脅威にさらされている。
ニュースに流れる凄惨な犯罪を見聞きし、人間同士でさえも畏れ合い、高い塀や窓の少ない「家」に引き籠るようになった。

失われた小さな生き物たちの居場所・・・日増しに深刻になる自然災害・・・疎遠になりつつある人間関係・・・
奪い取り合い、畏れ合い、遠ざけ合うだけでは、誰も幸せになれないのかもしれない。

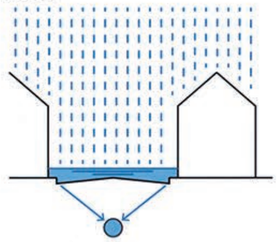
愛という言葉にはさまざまな意味があるが、その一つに「己の損得に関わらず他者を受け入れる感情」という解釈がある。
「家」にはさまざまな生き物の暮らし、自然環境、人間関係を受け入れられる、懐の深い森のような居場所が必要と考えた。

豪雨の雨水をそのひととき受け止めるための「深い水の器」を敷地いっぱいにつくる。
そこにさまざまな生命や暮らしを受け入れる「森の住処」を積み込む。
これらは自分だけでなく、まちを少しだけ安心で豊かにしていく。通りかかり遊びに来たり、真似てくれる人もいるかもしれない。

人の寿命よりも永くその場所に在り続け、まだ見ぬ未来につなぐ、「方舟」のような、そんな小さな２つのインフラをもった家。

すべてを今すぐ何とかするのは難しいかもしれない。　でも、「家」にできることはまだあるはずだ。
たとえば、わたしたちが自分と他が為に「家」をつくっていくことができたら、未来はほんの少し変わるかもしれない。

Before



集中豪雨災害

雨水は道路の排水溝により受け止められる。
近年の異常気象により頻発する集中豪雨は
公共下水の許容できる雨量を凌駕し、
住宅地に冠水による甚大な被害を与えている。
現在の家々はその脅威が収まるのを
ただじっと耐え忍ぶ。

After

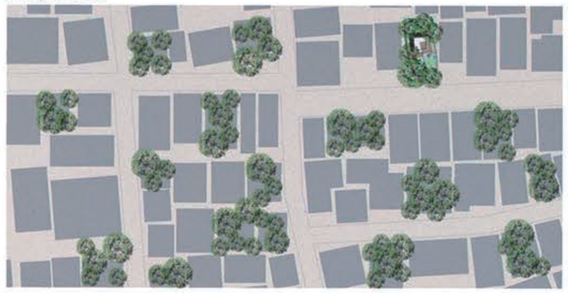
「深い水の器」

この家は敷地全体の地下に大きな空洞を持ち、
界壁のような境界をもたない。
公共下水の許容を超えた集中豪雨時には
その雨を一時的に受け止める「器」となる。
地下に溜まった水は、木々のための灌水や
生活用の中水にも用いられる。

「森の住処」

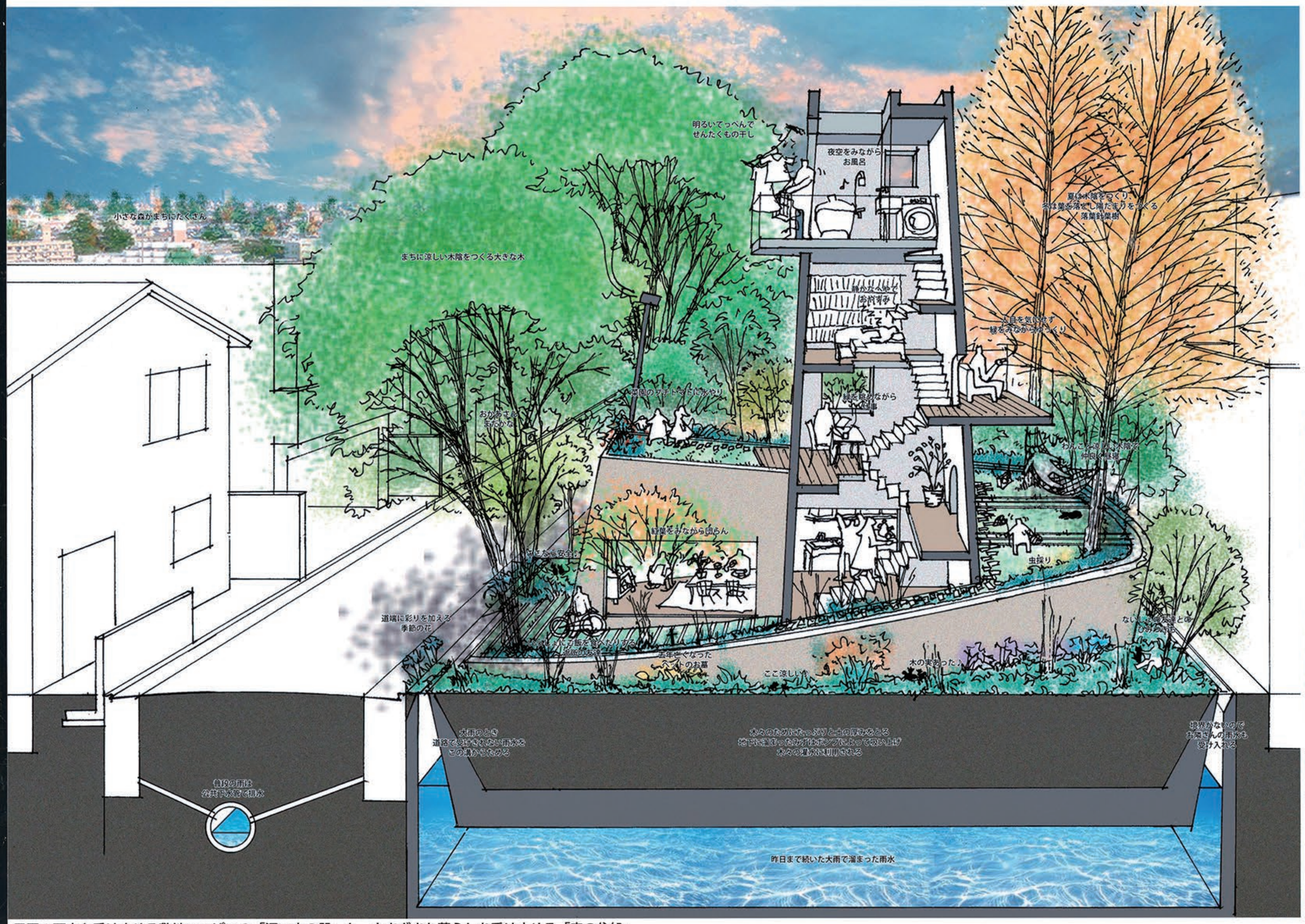
地上部には森、そして木々と同じ位の
スケールで忍ばせた家がある。
森を纏うことでそこには明るい場所、涼しい場所、
心地よいさまざまな居場所ができる。
まちに四季の移ろいを与えながら、
人や小さな生き物たちの暮らしを受け止める。

Long after...

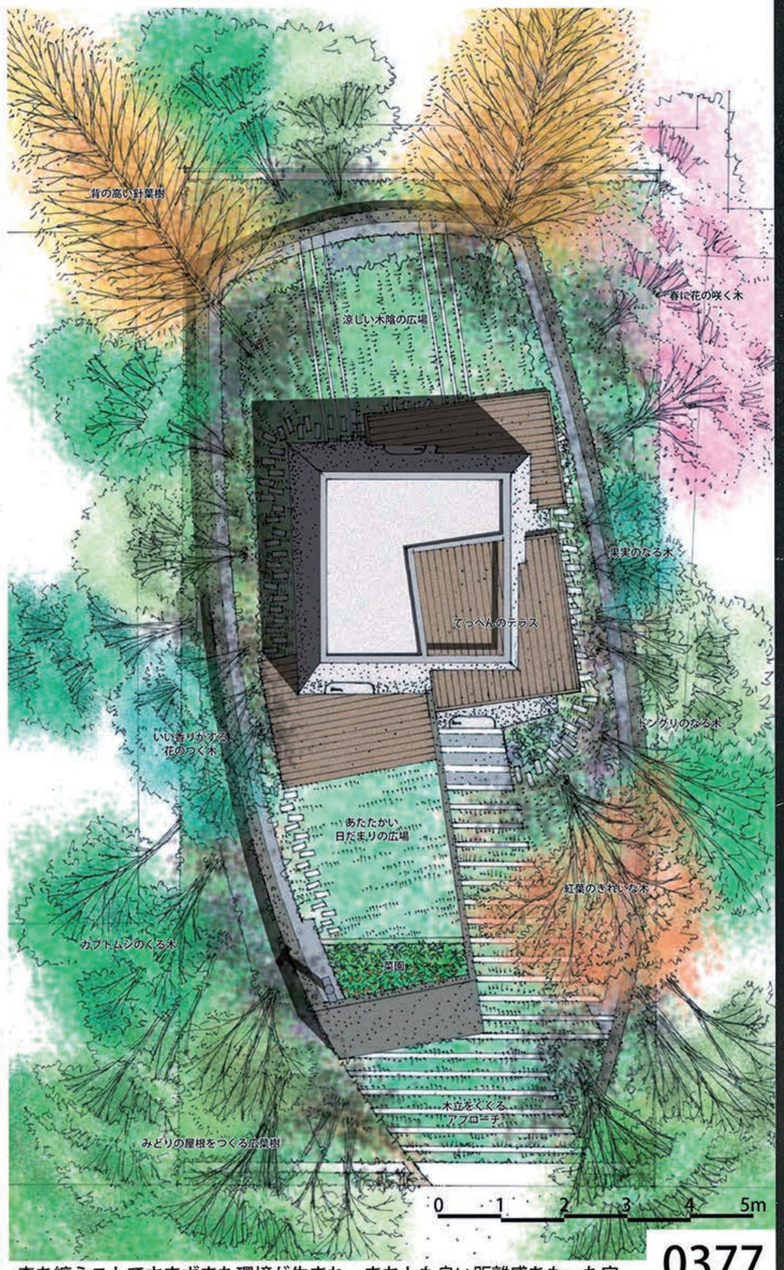


未来への「方舟」

大きな川に近い標高の低い閑静な住宅地。初めはひとつ、小さな「森」がまちに現れる。
近所の大雨による冠水被害が少し減った。森はまちの風景に鮮やかな季節の移ろいをみせる。
真似るようにやがて増えた「森」は、このまちを自然災害から守ってくれる存在になった。
将来、僕らが居ないまちにも、この森は未来に在り続ける「森の方舟」となる。



周囲の雨水を受け止める敷地いっぱいの「深い水の器」と、さまざまな暮らしを受け止める「森の住処」。



森を纏うことでさまざまな環境が生まれ、まちとも良い距離感をもった家